

---

# ~ 傭兵達の挽歌 ~ PSPo2i外伝

砂布巾

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

傭兵達の挽歌 P S P o 2 i 外伝

### 【Nコード】

N1458Y

### 【作者名】

砂布巾

### 【あらすじ】

グラール太陽系。

SEED事変という世界滅亡の危機は乗り越えたものの、その傷跡は深く、原生生物の凶暴化、さらには資源枯渇と新たな問題が浮上しているこの世界。

ヒューマン、ビースト、ニューマン、キャスト、そしてデューマン。

いずれの種族であろうと、この世界に生を受けたからには選ばねばならない。

生きる為の戦い。自分が自分を誇る為の闘争の方法を。

これは3つの惑星に生きる数人の傭兵達の生き様を表した物語。

この小説はファンタジースターユニバース（PSU）及びファンタジースターポータブル（PSPo）シリーズの世界設定を元にした二次創作小説です。

## 〈序章〉 討伐任務（前書き）

はじめまして、砂布巾と申します。

こちらはPSP用ソフト、『ファンタシースターポータブル2インフィニティ』の世界設定をもとに、筆者の気まぐれでまったり進めようと始めた二次創作小説になります。

何分小説など書くのは初めてですし、誤字や日本語の誤用等、お見苦しい点はあるかと思いますが、進行を暖かく見守って頂ければ、筆者が嬉しさに涙します。

また世界設定はPSU・PSP0・PSP02iの公式設定を遵守するつもりですが、ゲーム以外ではネットから得た知識を元にしていきますので、明確な間違い等発見された方、暖かくご指摘頂けたら筆者が感激でひれ伏します。

エミリアやイースンといった公式キャラもいずれは登場予定ですが、基本は世界設定を利用したオリジナルによるオリジナルストーリーの為、そうしたものが苦手な方は申し訳ありませんがUターンをお願いします。

では、しばし筆者の駄文にお付き合い下さいませませ。

## 〈序章〉 討伐任務

惑星モトウブ。

荒涼とした夜の西ググ砂漠をフローダーバイクで疾走する。

バイクのライトに照らされる風景は、彩りなど一切ない殺伐とした砂の世界。

資源枯渇問題が一番深刻に影響しているのは、自然が乏しいこの惑星じゃないだろうか。

『目標補足。デイマゴラス種。5時の方向・距離700。こちらに気づいた様子ですね。高速飛行しながら直線的に向かってきます。』

バイクを運転しながら、らしくない物思いにふけていた俺の耳に、後部座席からターゲットを目視した相棒の冷静な状況説明の声が入る。

『接敵まで20秒。大きさ・外皮の硬質化具合から、情報通り戦闘力Aランク相当と予測されます。これなら問題は無さそうですね。』

淡々と説明する声には余裕さえ感じられた。頼もしい相棒の様子に自然と頬が緩む。

『ここら辺からやつこさんの縄張りって訳か。ソアラの情報はさすがに正確だな。高い情報料ふんだくるだけのことはある。……よつとー！』

今回の依頼を振ってきた馴染みの情報屋に賛辞をつぶやいた後、標的を挑発するべくフロウダーバイクを蛇行させる。

『わっ！！』

突然の蛇行運転にバランスを崩したのか、後ろに乗った相棒が俺の背に手をつきながら声をあげた。

運転の為に前を向いたままの俺には見えないが、きつとキャストでありながら人工皮膚で感情豊かに動くその端正な表情は、俺への不満丸出しになっていることだろう。

『マースの運転は荒すぎです！戦闘と関係無しに事故死なんかしたら、間抜けな傭兵として歴史に名を残しますよ？』

『ハハッ、イカすなそれ。』

相棒の文句に軽口を返し、バイクのスピードを緩める。

後方の闇から、縄張りを荒らした侵入者を駆逐しようと巨大原生生物、デイマゴラスがあげる怒りの雄叫びが聞こえてくる。

『ポイント到達！打ち合わせ通りにいくぞ』

事前に戦闘場所と定めていた岩場のない開けた砂漠の一角まで来ると、相棒に戦闘開始を叫び、バイクを停止させて身一つで左方向に飛ぶ。

『バイクもタダじゃないんですがね…っ！』

同時に相棒も散開するように俺とは逆の右方向へ飛び退く。

直後、後方から飛来した成人の体の大きさを軽く超える巨大な岩が、俺達の乗っていたフロードーバイクを直撃した。

『うはっ、狙い通りとは言え、派手にやってくれるわ』

デイマゴラスが投げた岩により、バイクは大破・爆発を起こし、炎上。

夜の砂漠に紅蓮の炎が柱のように立ち上がる。

爆風を避ける為のうつ伏せの状態から、標的を迎え討たんと跳ね起きると、赤い炎の光に照らされ目前の闇の中に醜悪な巨大原生生物の姿が浮かび上がった。

俺達と同じ二本の手足を持ちながら、ヒトの五倍を優に超える巨大な体躯、岩石のように硬質化した皮膚は怪物という形容にピッタリだ。

つり上がった黄色い双眸はこちらを外敵と見なし、炎の揺らめきを映しながら殺意に満ち溢れている。

いやいや、心臓の弱いヒトならあのツラ見ただけで色々漏れちゃいそうだわ。

『あーあ、バイクもつたいないですねえ。……この演出、本当に必要なんですか？』

呆れたように呟く相棒。

『ちゃんと自慢のその目の内蔵カメラで撮っておいてくれよヘンリー。次のクライアントへの売り込み資料にするんだから。』

炎上するバイクを尻目に笑いながら語りかけた俺へ苦笑しつつ、ヘンリーも愛用のナツクル、ブレイン・スパイラルを取り出し装着した。

鮮やかな青を基調とした体の装甲と両腕に着けた黒い鋼拳。

顔だけ見れば一見温和な優男に見えるくせに、醸し出す雰囲気はこいつが数多の戦場をくぐり抜けた歴戦の勇士であることを証明している。

『本来は偵察任務用の機能であって、プロモーション映像の撮影の為ではないんですがね。』

そうぼやきながらも、目前で敵意を剥き出しにしているディマゴラスを見やり、相棒たる青いキャストが戦闘態勢を取る。

『自分の持つ能力は最大限有効に利用するべし。生きる上での鉄則だよ相棒。んじゃま、お仕事にかかりますか！』

ヘンリーに先んじて開戦の幕を切るべく、俺は手に持つ愛刀にフォトンを流し込み、再度こちらに投げる為の岩を探している標的に向かって駆け出す。

(悪いね、こつちも仕事なもんで。)

それが、この付近の集落の住民に甚大な被害を及ぼした巨大原生生



物への俺からの別れの挨拶だった。

〈序章〉 討伐任務（後書き）

物語の更新は一週間に一度を目標に頑張ってみよーかなと。

世界観が好きな作品だけに、自分のミジンコ程もない文才では表現しきれない部分がちやくちや多いとは思いますが、面白い話にできるよう自分なりに努力したい所存でやんす。

以降もお付き合い頂けたらこんな光栄な話はありません。

宜しくお願い致します。

## 登場人物紹介？

登場人物紹介

(オリジナルキャラクター)

マース・ウォーゼル

種族：ヒューマン

性別：男性

年齢：25歳

職種

ブレイバー

主な使用武器

ツインセイバー

愛用装備

剣影・リュウホウジドウ・オブシディアン

外見・特徴

本編の主人公の一人。赤髪、赤目、童顔。ゴコウバオリ着用。ニューデイズ生まれで服装などもかの地のものを好む。12才から傭兵として実戦を積んでおり、戦闘経験は豊富。生来器用なこともあり、ツインセイバーによる剣技、ツインハンドガンでの射撃、ロッドでのテクニクと戦闘に必要な技能は不得手なくこなす。

正義感が強く、弱者や子供には無条件に優しいが、それが目に見え

る形で出ることを好まず、悪びれることが多い。

しかし、相棒であるヘンリーなど周囲からは照れ隠しがバレバレな場合がほとんど。

日々を自由気ままに生きることが信条とする楽道家

筆者から一言

元々私がPSP02を始めた頃から愛用しているプレイヤーキャラクターですが、小説化にあたって性格づけをしたら、我が道を行くオラオラキャラになってしまいました。

作中でも愛用している剣影を全属性揃えたり、解放作業の為にフリーミッションをハムハムしたり、気がつけば長い付き合いになっていますね。

性格上のモチーフは、少年ジャプで絶賛連載中の銀魂の銀さんだったりしますが、いざ書いてみたら欠片も似てませんな（笑）

ヘンリー・ラウス

種族：キャスト

性別：男性

稼働期間：30年間

職種 ハンター

主な使用武器  
ナツクル

愛用装備  
ブレイン・スパイラル  
フローズンシューター

外見・特徴

ヘッドタイプは人間型。青い髪を後ろで束ね、金色の瞳が特徴的。接近戦に特化した格闘型のチューンナップを施しており、外装は身軽さを考慮し、ハウズアーム・ロウバストールソ・ラピトウスレックを使用。

元々同盟軍に所属していたが、マースの父親と出会い傭兵に転職。尊敬する人間の息子ということもあり、マースが傭兵となった時から面倒を見続けている。キャスト特有の合理主義を持ちながら、ヒトの持つ情の大切さを認識しており、優しさと強さを併せもつ存在になりたいと強く思っている。

自由奔放なマースのフォローに忙しい苦勞人。

筆者から一言

：マースの転生時に、LV上げを楽にする為に作った2ndプレイヤーキャラクターでした。

ゲーム中でも彼の装備するコクイントウの解放作業など、自分の装備充実そっちのけでサポートにいそしんでいます（笑）

マースにとっては兄であり、時としては母（笑）のような頼れる保護者といったところででしょうか。

性格上のモチーフは、懐かしのRPG、幻想水滸伝の主人公の付き人、グレミオさんです。（わかるヒトが少なそうww）

身近にこういうヒトがいてくれると本当にありがたいでしょうね。

実は作中、筆者のお気に入りキャラNo.1だったりします。

そのうち彼を主役にした短編なんかも書けたらいいーなと思ってみたい。

そこでも苦勞はさせちゃいそーですが（笑）

## 第一話　く傭兵稼業く

### グラール太陽系

母なる太陽と3つの惑星から成り、複数の異なる種族が暮らすこの世界。全ての種族の大元となった「ヒューマン」

ヒューマンから万物の生成エネルギー、フォトンをより効果的に扱えるよう遺伝子改良され生まれた「ニューマン」

惑星モトウブなどの過酷な環境下に適応するべく、強固な肉体的進化を求められ生まれた「ビースト」

そして、ヒューマンによって作り出され、後に自らの手で種族として自立の道を選んだ機械生命体「キャスト」

俺はヒューマンのフリーの傭兵として、キャストの相棒と共に、依頼に呼ばれるまま各惑星を転々としている。

全世界を震撼させた、あの悪夢の様なSEED事変が無事終結した今も、グラールは決して平穏とは言い難く、今回のように凶暴化した原生生物の討伐依頼は絶えることがない。

まあそんな物騒な世の中だからこそ、戦いを生業とする俺らのような連中も食いつばぐれないだけの仕事にありつけるってわけだ。

『うーわ、油断した。卸したての一張羅が台無しだこんちくしょう。』

先程の戦闘でディマゴラスが繰り出した石つぶてを避け損ない、シルドラインの防御障壁を突破された結果、お気に入りの私服ゴコウバオリはボロボロの有り様になっている。

『格下の標的だからと侮った報いですよ。近接戦闘にこだわらず、戦術に遠距離戦も絡めていれば余裕で避けられたでしょうに。』

やれやれといった具合にヘンリーが説教を飛ばしてくる。

『討伐任務のPRには迫力あった映像の方がいいだろ？距離を置いて銃をぶっ放してるだけじゃ、アピール度が足らねーのよ。』

組織に属さないフリーの傭兵にとっては、いかに自分が有能であるかを周囲に示さなければ良い仕事は廻って来ない。

見る者を魅了するエンターテイメントは、娯楽に限らず、客を求める仕事にも不可欠だというのが俺の持論だ。

『必要のない苦戦を強いられた戦闘映像なんて、顧客にマイナスイメージしか与えませんよ。バカですかアナタは。』

ため息まじりにつぶやく相棒。

やれやれ、男のくせにロマンがわからん奴だ。

俺達の手によって倒され、砂漠に横たわるディマゴラスに近寄りつつ、万が一息が残っていないかチェックを行っていたヘンリーは、



いまだに衰えない炎を一瞥し言葉を続けた。

『まあ、これだけ派手に燃え上がっていれば、目印としては役立ちそうですね。ソアラさんも私達をみつつけやすいでしょう。砂漠で野宿なんて真似は御免ですから、早いところ迎えが欲しいですね。』

討伐目標の生命反応が完全に停止したことを確認したのか、ヘンリーがそう言って頭上の夜空を見上げる。

つられて俺も上空に目を向けた。砂漠から見る満天の星空はなかなかロマンチックだが、側にいるのが野郎のキャストとバカでかい原生物の死体であっては長居したいとは思わない。

『同感だな。そろそろ時間のはずなんだが……お、来た来た。』

夜空に響く小型のフライヤーのエンジン音。

打ち合わせの時刻通りに現れた小型艇は今回の依頼の仲介者である情報屋の物だ。

明るい緑色の小型艇の側面には、でかでかとショッキングピンクのハートマークの塗装と、《愛の情報屋 ソアラ》という目に痛い宣伝文句が記されている。

うん、目立つのはいいが心からバカだとしみじみ思う。

あんなふざけた趣味であつても、情報屋としての能力は文句なくピカイチときている。世の中不思議で一杯だ。

燃え上がるフローダーバイクに気づいたのか、小型艇は俺達の頭上

で旋回すると、速度を落とし近くに着陸する。

バカやろう、こんな近くで降りたら砂が舞い上がって俺達にかかりまくるだろーが。

仏頂面を隠すことなく立つたまま待ち続けると、着陸した小型艇からタラップが降り、小柄な女ビーストが飛び出てきた。

『はいはい、お疲れさまー 予告時間通りに仕事終わらせてるなんて、さっすがだねお二人さん 』

我らが《愛の情報屋さん》は、満面の笑顔を浮かべながらこちらに手を振り近づいてくる。

デイマゴラスの死体を確認し、仲介した依頼が無事完遂された様子を見て、上機嫌なのだろう。

所有している小型艇と同じ緑の髪は肩のあたりで切り揃えられ、好奇心が強い性格を表す大きな瞳が活発な印象を周りに与えている。

ソアラ・バーツ。小柄な体やまだ少女の域から出ない若さを侮る人間も多いが、一度でも彼女から仕事を廻された者ならばその情報の正解さ、プロ意識に信頼を寄せるはずだ。

今回も事前の打ち合わせ通り、正確な予定時刻に姿を現した。

クライアントへの報告の為か、デイマゴラスの死体を小型カメラで撮影した後、炎が消え始めたフローダーバイクの残骸を興味深そうに見つめる。

『しっかし、ホントにフオーダーぶっ壊したんだ？あはは、相変わらず派手好きだねえ。まあアタシもこーいのは嫌いじゃないけど。』

意外にも相棒よりロマンを理解する情報屋。

砂かけられたことぐらいは忘れてやっても良いかもしれない。

『あ、フオーダーは借り物だから、アンタらへの報酬の中から弁償しとくね』

二秒で前言撤回だこんちくしょう。

『あ、その費用は私ではなく、マースの取り分からお願いますよ？』

容赦のかけらもない相棒からの追い討ち。どうやら俺のビジネス理論は二人には高尚すぎるようだ。

『バカやろう、撮った映像使えば絶対わんさか仕事来るんだぞ？必要な尊い犠牲ってやつだ。ヘンリー、後で映像データよこせよ？ソアラにも渡しとくから、馴染みの顧客に売り込みしといてくれ。』

『わ、割と本気だったんですねマース……ま、まあ戦闘データ収集の為に映像記録は撮りましたが。』

苦笑する相棒。

冗談だとも思ってたのか？仕方ない、天才とは常に孤独なものである。

『あはは、OKOK 任せときなさいって。ああ、ただ次の仕事ならわざわざ探す必要なんてないよ。』

『新しい依頼が来てるのか？』

聞き捨てならないセリフを耳にしソアラに視線を移すと、うら若き情報屋は両手を頭の裏で組み、鼻歌でも歌い出しかねない機嫌の良さで言葉を続けた。

『来てる来てる それも結構大口の依頼だよ。いやあ、こんだけのビッグネームからお声がかかるとは、アタシも仲介役として鼻が高いよ』

『イヤにもつたいぶるじゃねーか。どこのお偉いさんだ？』

普段からテンションは高めの人ではあるが、仕事からみでここまで上機嫌なのは珍しい。

よほど旨味のある顧客からの依頼なのだろう。

イタズラっぽく笑いながら俺とヘンリーの顔を交互に見やり、我慢できないといった様子で話を続ける。

『うふふ、聞いて驚きなさい。依頼人はVIPもVIP。このモトウブそのものを取り仕切る、我らがドン・タイラーよ。』

ダグオラ・シティー

西ググ砂漠での戦闘から約3時間後、惑星モトウブの首都であるこの街にソアラの小型艇で運ばれた俺達は、ソアラが言う「次の仕事の依頼人」との待ち合わせ場所らしき酒場に案内された。

依頼人の指定らしいが、人目を避けたいのか、中心部から随分離れた寂れた酒場だ。

無愛想なマスターにニューデイズ産の酒を頼み、テーブル席に腰を降ろす。

依頼人を迎えに行くと言って出て行ったソアラを待つ間、手持ちぶさたになった俺は先の戦闘で台無しになった私服を新調するべく、服飾関連のショップのカタログに目を通した。

ほお、ウルスラ・ローランが来月に新作発表か。男モノがあれば目を通しておきたいところだ。

カタログを読みふけていると、向かいの席に座ったヘンリーが話しかけてきた。

『どう思います？マース。』

『あー？ウルスラの新作か？まあ彼女のセンスは最近のデザイナーの中じゃピカイチだからな。ニューデイズ風な男性服とか作ってくれたら言うことなしなんだが。』

『とことんバカですかアナタは！ファッションのことではなく、今回の依頼についてですよ！』

憤慨したように言い捨てた相棒が俺の手からカタログを没収する。

ああ、まだ読み終わってないのに。心に余裕がない男はモテないぞ相棒。

『なんだよ、何か気になることでもあんのか？』

カタログを奪われた俺は仕方なく飲みかけの酒が入ったグラスに手を伸ばす。

仕事の話の前にアルコールを取るのはやめるべきだとヘンリーは言っていたが、こちらとらさつきー仕事終えたばかりなのだ。

依頼人の都合で呼び出された以上、ちよっとはワガママ言おうとバチはあたるまい。

『アナタの大物ぶりには慣れてますが、少しは緊張感もって下さいよ。今回、顧客はあのドン・タイラーですよ？』

ドン・タイラー。

あのSEED事変の影響でモトウブを仕切っていた「モトウブ通商連合」や、裏から実質的な支配をおこなっていた四大ファミリーが消滅した後、混乱するローグス全体をまとめあげ、今ではモトウブのトップとしてその名が響き渡るローグスの英雄。

確かに、本来なら一介のフリーの傭兵にすぎない俺達が縁を結べるような相手ではない。

『ソアラが熱心な売り込みやってくれたんじゃねーの？俺達も少しは名が売れてきたってこった。喜ばしいことじゃねーか。』

自慢ではないが、俺もヘンリーも傭兵としてのキャリアは長い。Sランクの原生生物の討伐依頼だろうと、事前の情報さえしつかりしていれば確実にこなす自信はある。特に腕利きの情報屋であるソアラと組むことが多くなつてからは、グラールーの規模を誇る民間軍事グループ、ガーディアンズでさえ手を焼いていたレベルの依頼をいくつかこなしていた。

こと戦闘に関してなら、大物から指名を受ける程の評判が廻っていても不思議なことはない。

『別に客が大物だろーが、いつも通り与えられた依頼をこなせばいいだけだろ。リラックスしてこーぜ相棒。』

『大物うんぬんではなく、相手がローグスだということに気にして下さい。以前の依頼で彼らとトラブルになったことをもう忘れたんですか？』

嫌なことを思い出したといった具合に顔をしかめるヘンリー。

そう、確かに以前、俺達はこのモトウブで一度ローグスの小さなファミリーと一悶着を起こし、命を危険にさらしたことがあった。

彼らには他の星における法律・常識といったものは一切通用しない。

過酷なモトウブの環境がそうさせたのか、彼らには彼らが決めた独自のルールがあり、その掟を破った相手には容赦なく、暴力も含めた制裁を与えようとする。

特にファミリーと呼ばれる集団の結束は固く、仲間がよそ者に傷を

つけられようものなら、自分達のメンツにかけて報復をおこなう。

以前俺達が受けたのは、誘拐されたヒューマンの娘を助け出すという、パルムの富豪からの依頼だったが、実際にフタをあけてみれば、ローグスの小さなファミリーが元締めになっていた賭博場で借金を作った依頼人が、返済を渋ったあげく、報復として娘をかどわかされたといった内容だった。

悪質なイカサマにはまったのだと、後に泣きながら言い訳してきた元依頼人の顔も、自分達のシマを荒らしたと何度も襲ってきたローグスの連中のことも、どちらもあまり思い出したい過去ではない。

結局は土地のルールに従い、依頼人に多額の賠償金をローグス側に支払わせることで一応の決着をつけたが、「あの金持ちもお前等も、騙される方が馬鹿なんだよ」と得意顔で言い放ってきたローグス側のボスのツラは、今でも思い出すたびにタコ殴りにしたい衝動に駆られる。

『まあ、あん時は相手のローグスも悪辣な連中だったからな。噂通りなら、ドン・タイラーってのは筋は通しても義理を欠くような真似はしないって話じゃなか。まあ依頼の話聞くだけなら特に問題ねーだろ。』

そう、まだローグスの一ファミリーでしかなかったタイラーファミリーの時代から、ドン・タイラーは「侵さず、殺さず、貧しきものから奪わず」といった信条を掲げた義賊として有名だった。

個人的にそういう類の信条を貫く連中は嫌いじゃない。

ローグスだからというだけで、俺達とトラブった悪質な連中と同じ



ように見るのは偏見というものだろう。

『だといいんですがね……………！！…マース、気をつけて！』

言葉を交わしていた相棒の表情に緊張感が宿る。

気がつけば元から客の少なかつた酒場は、マスターも含め俺達以外姿を消している。

相棒から注意を呼びかけられたのと同時に、俺も自分に向けられる物騒な気配を感じ取り、即座に目の前の丸いテーブルを横なぎに蹴り倒し、倒れ込むようにその死角を利用して床に伏せた。

ガガガガガガ！！！！

殺気を感じた方向は俺の右手側にあつた広い窓から。

予想を裏切らず、窓からフォトン弾の嵐が俺の座っていた椅子の位置を襲ってきた。

『相手は何人だヘンリー！』

窓から銃撃を受けない店の奥へ転がりながら、突然の襲撃に応戦するべく、ナノトランサーからツインハンドガン・オブシディアンを取り出す。

呼び出した銃の重みを手に感じた後、自分と同様に銃撃から身をかわし、既に臨戦態勢としてライフル・フローズンシューターを手に持った相棒へ敵の数を問いかける。

『サーチ完了！店の外、銃撃方向・ここから距離40程の位置に固

まった敵対反応が3。体温も感知しましたからマシナリーではなく生命体ですね。』

戦況を確認し、こちらに告げる相棒。

『マジかよ、嵌められたかあ？』

脳裏に先ほどまで一緒だった、馴染みの若い情報屋の姿が浮かぶ。

アイツが俺達を嵌めて、何か得するようなことがあるのだろうか？

緑色の大きな瞳の憎めない笑顔を思い返すが、そうした卑劣な真似をする奴ではなかったと思う。

『以前のトラブルの落とし前でしょうか？ドン・タイラーがローグスを束ねているなら、あの一味も吸収されたはずですし。解決したと思っていたのはこちらだけだったのかも知れません。』

ヘンリーがやれやれといった具合で顔を左右に振る。

『ちっ、面倒くせーなあ。……ん？』

俺達が死角に逃げ込んだことに気づいたのか、銃撃が止む。

俺の視線の先には、銃弾の雨を受けた、倒れたままの丸いテーブルがある。

『……ちっ、舐めた真似してくれるわ。……ヘンリー、わかってるな？』

俺と同じく、テーブルを見たヘンリーがライフルに手をやる。

こっちの意図を即座に理解してくれるのは、長年の付き合いの賜物だろう。

『了解。やりすぎないようにしますよ。どうします？この距離で撃ち合っても、制圧は可能だと思いますが。』

『まだるっこしい。俺が行くから援護を頼む。どうせ服は新調するつもりだったんだ。せいぜい派手にやってやるさ。』

言い捨てると同時に俺はツインハンドガンから愛刀・剣影に装備を喚装しなおし、窓側の店の壁にフォトンを流した刀身を叩きつける。そのまま蹴りをくれると、石で出来た店の壁に見事にヒト一人が通れる穴が出来上がった。

『壁の弁償はしねーからな、こんちくしょう！』

気合いを入れる為の叫びをあげ、自分で作った穴から店の外へ飛び出す。

視線は銃撃を受けた方向。

夜明け前のダグオラ・シティーの街並みに、ヘンリーが感知した通り三人のビーストの姿を確認する。

予想外の方向に出現した俺に驚いたのか、三人のビーストは慌ててこちらに銃口を向け直そうとしている。

お構いなしに距離を詰めるべく駆け出す俺。

『っらああああー！！ー！』

まっすぐに突っ込んでくる俺に驚愕の表情を浮かべながらも、トリガーを引き絞ろうとするビースト達。

刹那、そのうちの一人が突然銃をもったまま、酒場の方向から飛んできたフォトン弾を身に受け、後方に吹き飛んだ。

（ナイス援護！）

心の中で相棒を褒め称え、仲間の一人がやられたことにつるたえを見せるビーストの一人を標的に定める。

残るビースト二人は酒場からの銃撃より、急速に接近してくるこちらを危険と見たか、やっと手に持つライフルで射撃してきた。

『シヨボいんだよバカやろう！』

いちいちこちらの行動に驚愕し、アクションが遅れる三下の銃弾などかわすだけの脅威を感じない。

バシユツ！！

俺は身にまとうシールドラインに一時的に強いフォトンを流し込み、襲いかかる複数の銃弾が体に届く前に全て消滅させた。

慌てて次弾を撃ち直そうとする連中。

『5点。話にならねーよアンタら。』

言い捨てると同時に、距離を詰め終えた俺は走った勢いそのままに

標的にしたビーストの一人に飛びかかる。

『シッ!!』

左手に逆手に持った剣影の鞘を横なぎに払い、標的の胴をしたたかに打ち据える。

鞘に打たれたビーストは苦悶の表情を浮かべながら、真横に吹き飛んだ。

『くっ!!』

残る一人は、距離が近づいたことで、ライフルから片手用のセイバーに武器を喚装し直す。敵を目の前にしてのその行動は俺にとって絶好の際にしかならない。

『出直してきな!』

先程と同様、左手の鞘を使い、今度は先端を利用した突きを相手の腹にお見舞いする。

『げふっ!!』

突きを食らった最後の一人は、派手に後方に倒れ込んで動かなくなった。

『はい、終了。』

付近から敵意がなくなったことを確認し、剣影をナノトランサーに収納する。

酒場から飛び出して制圧まで約一分。

まあまあといったところか。

『しっかし手応えのない連中だったなあ。ヒトを襲うには経験が足りなすぎる感じだったが。』

襲ってきた連中の顔をじっくり拝んでやろうと、泡吹いて倒れている一人に近づくべく歩き出す。

すると俺の耳に、突然聞き慣れない女の声が入ってきた。

『お見事！』

人通りのないダグオラ・シティーの街並みに、パンパンという拍手の音がこだまする。

『あん？』

音のした方向へ目を向けると、街並みの民家の死角から、一人のヒューマンの女が現れた。

体のラインがあらわになった挑発的な服装で、微笑みながら拍手を続けている。

見た感じ、年の頃は二十代半ば。長いストレートの髪が街にふく風に揺られている。

蠱惑的な印象を受ける美人だが、過去の記憶に出会った覚えはなか

った。

『だから言っただじゃなか！こんな真似するなんて仲介役のアタシに  
対する侮辱だよ！』

突然の美人の出現に面食らっていると、今度は聞き覚えのある声の  
我らが腕利き情報屋ソアラが、美人の後に続いて姿を現した。

こちらはかなりご立腹の様子で、拍手を続ける女に食ってかかるよ  
うに叫んだ後、バツが悪そうにこちらを見て、ゴメンと両手を併せ  
て謝ってきた。

『やれやれ、やっぱりこんなことだろうと思いましたよ。』

後方からの足音に振り返ると、ライフルをナノトランサーにしまい、  
戦闘態勢を解除したヘンリーが近づいてくる。

ヘンリーはこちらを見て、外傷がないことを確認すると満足げに微  
笑む。

こいつからしてみれば、いまだに俺の戦い方は危なっかしく目に映  
るのだろう。

心配性な相棒に五体満足な自分の様子を見せた後、女を問い詰める  
べく視線を移す。

『腕試しはすんだかい、依頼人さん？……ってか、ドン・タイラー  
が女だなんて話は聞いたことなかったけどな。』

そう、この襲撃は言ってみれば茶番だったのだろう。

深夜、中心部から離れた一帯とは言え、モトウブの首都であるダグ  
オラ・シティーでこんな戦闘があつて、人っ子一人姿を見せないの  
も、事前に裏で手が回っていたからだとすれば納得がいく。

『驚いた、気づいてたの？』

俺の言葉を受けて、女は目を見開いて言った。

やれやれ、これだけ舐められるとさすがにこっちの気分も悪くなる。

『ソアラの様子だと、事前に俺達の実力は聞いているはずだがな。酒  
場の銃撃、どんだけ固いテーブルか知らねーが、普通あれだけ弾丸  
食らったら原型留めずに粉々になるもんだ。はなっから連中に武器  
のフォトン出力をスタンモードにして襲わせたんだろ？』

最初の銃撃の時点できな臭い点は多かった。

俺達を殺すのが目的なら、それこそ店ごと爆破するなり、もっと他  
にやりようはあつた筈だ。

まあそんな真似されてれば、こっちもヘンリーが先にサーチして気  
づいていたろうが。

相手側に明確な殺意がなければ、こちらも無用な殺生は好まない。

俺もヘンリーも、使用した武器はスタンモードに切り替えていたか  
ら、伸びている三人のビーストも命には別状ないはずだった。

女は俺の説明を聞くと、満足そうに微笑んだ後ソアラに話しかけた。



『アナタを疑った訳ではないけど、聞いた話以上に信頼できそうな方達ね。ありがとう、謝礼はお詫びも兼ねて十分させて頂くわ。』

ソアラは依然として慚然とした顔をしているが、謝礼というセリフが聞こえた際に一瞬眉が下がったのを俺は見逃さない。

このアマ、後で迷惑料としていくらかふんだくるぞ、こんちくしよ  
う。

女はソアラに語りかけた後、俺とヘンリーに体を向き直し、深々と頭を下げてきた。

『この通り、失礼をお詫びします傭兵殿。何分、絶対に失敗が許されない依頼なものですから、私の性分で、自分の目で見なければ安心してお願ひ出来なかつたのです。』

突然態度を変えられた上、丁寧な謝罪を受け、今度はこちらが狼狽する。

ヘンリーを見ると、こいつもこつちを見ながら苦笑して降参だとはかりに肩をすくめている。

やれやれ、相変わらず女に甘い奴。まあ俺も人のことは言えないんだが。

『ソアラ、いい加減教えてくれよ。ドン・タイラーからの依頼ってのはデマだったのか？』

ことの顛末は飲み込めたが、一点だけ理解できない点が残る。

ソアラの話だと、今回の依頼はドン・タイラー自身からのはずだ。

目の前の女がドン・タイラーだと言うのはさすがに無理がある。

何しろ性別も、種族さえ違う。

ビーストが支配するこのモトウブで、ヒューマンの女がトップに立つことなんて有り得ない話だ。

『いえ、おっしゃる通り私は代理の者ですが、依頼は間違いなくドーンからのものです。その辺りの詳しいお話もさせて頂きたいので、今度こそちゃんとした場所に移りましょう。個人的なお詫びとして、謝礼は別にして奢らせて頂きますわ。』

ソアラが口を開く前に、女が俺に答えた。

やれやれ、また随分きな臭い話になってきたな。

『……わあつたよ。その代わり、一つ条件がある。』

俺からの問いに、女が不思議そうにこちらを見やる。

『……酒場の壁の修理代を請求するのは勘弁してくれな？別口でバイクの弁償請求されて、財布に余裕がねーんだわ。』

言い終えた俺を見て、女は口に手をあてて笑い出し、ソアラとヘンリーがやれやれといった感じでうなだれた。

どんな依頼だか分からないが、こちららフリーの傭兵稼業。

体張るのには慣れている。

きな臭い話だろうが、モトウブのボスからのれっきとした依頼だつてんなら、好奇心もつづく。

俺は呆れている相棒達の肩を叩き、場所を変えるべく歩き始めた女

の後に続いて、もうじき夜明けを迎えるダグオラ・シティーを歩き出した。

## 第二話 ～誇り～（前書き）

うわあ、第一話を自分で読み返したら至らない点が多すぎて、顔からバーストラップEX。

書いてる時と読み返してる時では、当然ですが視点が完璧に変わりますね

（＝＝；）

そのうち言い回しとか修正できたらいいなあ。

実はまだサイト内の修正の仕方が理解出来てませんが（笑）

とりあえず、続きの第二話、逝ってみます。

宜しくどーぞー。

## 第二話　く誇りく

人間、人生を充実したものにする上で本当に大切なモノなどそう多くはないと思う。

金？そりゃ生きる上で必要不可欠なモノだし、メセタがあればあるだけ生活するのは潤うもんだろう。

だが、俺も仕事の関係上、腐る程金を持った連中から依頼を受けたこともあったが、彼らの全てが幸せに見えたかと言えば、決してそんなことはない。

いや、貧乏人のひがみとかじゃなくてよ？

俺から見た連中の様子は（無論、全員って訳じゃないが）金っていう価値観に縛られ、どこかもっと大切なモノを忘れてしまっているように見えた。

そういった意味で、昨夜出くわしたあのヒューマンの女は、己の生き様に確固たる誇りを持っているように感じられた。

少し、見るのが眩しい程に。

やれやれ、どうかしてるな。

自慢じゃないが、俺は現在の自分の生き方に大きな不満はない。

神様ってのがいたとして、生まれ変わるチャンスなんてモノを恵

んでくれたとしても、「あー、別に今のままで構やしねーよ。」と一蹴する気満々だ。

ただ、自分以外の誰かに、確固たる己の意志で、あそこまで命をかけられる生き方つてのに、不覚にもちよつとした感動を覚えちまつたんだ。

そう、ただ、それだけの話……

『マース！いい加減そろそろ起きて下さい。このままだと夕方になつてしまいますよ！』

快適なまどろみは、よくあるオカンの定番といったセリフで打ち切られた。

毎度のことながら、モーニングコールは野郎ではなく、女性にして頂きたいとつくづく思う。

出来れば二十代半ばから三十代前半の範囲で。

『あー、頭いてえ。くそつ、二日酔いなんざ久しぶりだな。』

ズキズキと痛む頭を押さえ、カプセル型の寝床から身を起こす。

『奢りと言われたからって調子に乗って飲みすぎですよ。向こうは笑って許してくれましたが、代金請求されたらどうするつもりだったんですか？』

小言を言うのが趣味な相棒。

『バカ言え。失礼な真似した詫びだって言うんだから、遠慮なく飲むのが礼儀だろが。これでお互い今後わだかまりなくツラを合わせられるつてもんだ。』

そう、俺達は昨夜の一騒動の後、ドン・タイラーの代理を名乗ったヒューマンの女性に連れられ、正式な依頼の話を聞くべく、彼女がオーナーを務めているという別の酒場に移動し、明け方から昼前まで過ごした。

依頼に関する話が終わった後、仕事があるからと言って機嫌が直り笑顔で出て行ったソアラを除き、かなりのバカ騒ぎを行った。

昼を前にしてさすがに見かねた相棒が、半ば強引に俺を連れ帰り、こうして街外れに停めてあった我らが本拠、マイシップの「オルシナス号」で意識を失ったという流れだ。

『うん、旨い酒だった。』

しみじみと頷く俺を見て、ヘンリーが疲れた様子で話しかけてくる。

『酒の話はもういいですよ。それより、そろそろ支度をしませんと。話を引き受けたからには依頼人を待たせる訳にはいきませんよ。』

『ああ、そうか、待ち合わせだったな。早速貰った服が役に立つつてもんだ。』

仕事とは言え、美人との待ち合わせというのはいいもんだ。

ヘンリーに言わせれば、依頼に雑念を交えるのはミスにつながるっ

て所だろうが、締める所は締める、楽しむ所はとことん楽しむのがモットーな俺としては、この程度の雑念くらい多目に見て頂きたいと強く思う。

『新しい服って、結局ゴコウバオリじゃないですか。ああ、いいから早く支度して下さい！いい加減にしないと置いて行きますよ！』  
ヒトのファッションセンスにケチをつけるなど文句を言おうとしたら、先手をうたれてしまった。

やれやれ、まあ服装に興味を持たない相手に熱意を持って語っても虚しくなるだけか。

俺は鼻歌を歌いながら、新品の真紅のゴコウバオリに袖を通した。

同時に、これをくれた相手である依頼人代理との昨夜のやり取りを思い出す。

『これで良かったかしら？』

店につくなり、俺の身なりを見渡した女ヒューマンは、「そのままだと色男が台無しだから」と見え透いたお世辞と共に、こちらが希望する服を用意すると言ってきた。

無論、お世辞だろうと嬉しいものは嬉しいので、俺の表情はかなり弛んでいたと思う。



こちらが愛着のあるゴコウバオリを指定すると、ニューデイズ以外では手に入りにくいこの服を、部下と思われる男ビーストに命じてあつという間にどこからか調達してきた。

『驚いた。ローグスってのは色んな力を持つてるんだな。』

てつきり、手に入るのは早くても明日以降だと思っていた俺は心底感心してそつつぶやく。

『ご存知の通り、通商連合が消滅した後、このモトウブを支えているのは私達ローグス……いえ、ドン・タイラーの威光ですから。これぐらいなら喜んでお世話させて頂きますわ。』

最初に現れた時と同じ蠱惑的な笑みを浮かべ、女が答える。

(やっぱりローグスの一員って訳だ)

整った容姿に金色の長い髪、男の視線を惹きつけるラインがはつきりした見事な体型。

ローグスといえばゴツくてムサイ髭をはやした男ビーストがスタンダードなイメージだった俺には、ドン・タイラーの代理を名乗った時点で分かりきったことながら、彼女がその一員であることに軽い驚きを感じていた。

『んじゃま、こいつはありがたく頂いとくよ。正直、ボロボロの服をこれ以上着続けるのは苦痛だったんでね。……ああ、ついでもう一つ頼みがあるんだが。』

『マースー!』

図々しいですよ、と目で合図をよこす生真面目な我が相棒。

隣にいるソアラまでもが、ジト目で俺を睨んでくる。

『構いません、どうぞ遠慮なくおっしゃって下さい。』

そうした気配を気にせず、変わらぬ笑顔をくれる依頼人代理。

『ははっ、別にこれ以上なんかくれって話じゃないさ。そろそろ名前、教えてくれないか？いつまでも「なあ」とか「あんだ」なんて呼ぶのは無粋だろ？』

俺の言葉を聞き、心なしが彼女の笑顔に親しみの感情が加わった。

『失礼致しました。名乗るのが遅れて申し訳ありません。私は……』

『あー、待った待ったそれも違う。』

『？』

こちらから希望された名乗りを止められて、不思議そうな顔をした彼女が俺を見つめてくる。

『その喋り方だよ。丁寧に対応してくれるのは光栄だが、俺達はそんな大層な身分じゃない。最初に会った時のくだけた感じの方が、こっちも気が楽なのさ。』

わりいね、と苦笑しながら言葉遣いを楽にするよう求めてみた。

すると彼女は今度こそ楽しそうに、気取った感じの一切ない、親しみのこもった笑いを浮かべた。

『あははっ、ホント変な人。傭兵って人種は大概自分を大きく見せたいがるものだと思ってたわ。』

『そいつは偏見ってもんだ。なあヘンリー。』

笑いながら相棒に同意を促してみる。

『マースはくだけすぎですよ。』

『アイツはあれが地だから気にしないでくれ。』

うん、同意を求める相手を間違えた。

『あははっ、ごめんなさい。そうね、遅くなっただけど名乗らせてもらうわ。私はシアリー。シアリー・ロウよ。ここ、ダグオラ・シテイーでローグスの一員としてドン・タイラーのお手伝いをしているの。』

依頼人代理改め、シアリーはそう言ってこちらに右手を差し出してきた。

『マース・ウォーゼルだ。あっちは相棒のヘンリー・ラウス。ソアラのことは知ってるんだよな？』

宜しく、と差し出された右手を握り返す。

『ええ、さっきはホントにごめんなさいねソアラ。アナタのプライ

ドを傷つけてしまったわね。』

先刻の俺達への腕試しの件だろう。やはりソアラもこちら同様、何も知らされていなかったようだ。

『まあ、済んだことだし、もう気にしてないよ。コイツらも無事だったしね。』

よく意外に思われるが、俺達、いや俺が知っている仕事仲間の中で誰よりもプロ意識が高いのがソアラだ。

自分が関わった仕事には常に全力で取り組み、質の高さを求める。

俺が彼女に情報屋として全幅の信頼を寄せる理由もそこにある。

今回、自らが推薦した俺達二人について、自分の話だけで実力を信じてもらえなかった事実は、仕事にプライドを持つ彼女にとって屈辱以外の何物でもなかっただろう。

謝罪の意味を込めた礼金の約束は取り付けているが、納得しかねる部分があってもおかしくはない。

ただ、実際に危険な目にあった俺達がシアリーと和解した以上、事を荒立てるつもりもないのだろう。空気が読める奴つてのはそれだけで尊敬に値する。

『ごめんなさいね。お詫びにならないかも知れないけど、今回の依頼の内容に関して、こちらの事情を説明させてちょうだい。』

とうとう本題って訳だ。

正直、俺も一傭兵として、モトウブを束ねる存在からの依頼というものに興味は強い。

加えて、実力を認められてのご指名となれば抑えようとしても自然にテンションは上がる。

『まず始めに、この場に私達のリーダーである、ドン・タイラーがいないことを謝罪させて頂くわ。』

そう言ったシアリーが苦しげに顔を歪めた。

『別にそこまでおかしいことはありませんよ。モトウブのトップともなれば、色々ご多忙でしょうし、私達にそこまで気を使う必要はありません。』

先程から謝りっぱなしのシアリーに同情したのか、普段俺の後始末で謝る機会が多い為シンパシーを感じたのか、ヘンリーが助け舟を出した。

『いえ、そう言ってもらえるのは本当にありがたいのだけど、実はドン自身、この場に参加することを強く望んでいたの。』

意外なセリフがシアリーから飛び出る。

『どういうことだ？急な予定でも入って来れなくなったのか？』

正直、ヘンリーが言った通り、一介の傭兵への依頼なんぞ、部下に任せても不思議じゃない。

今までも依頼人は姿を現さず、ソアラのような仲介人とだけやり取

りをした仕事も決して少なくない。

『ある意味、急な予定というのは正しいわ。ドンは今、うかつに身動きが取れない状態なの。……………一人の裏切り者のせいで。』

つぶやく言葉の最後のフレーズには、シアリーのはっきりとした憎しみの感情が込められていた。

『なるほど…ね』

今のセリフで大体の道筋が読めた俺は、想像以上に大きなものになりそうな依頼の気配を感じていた。

SEED襲来時の混沌により、壊滅した4大ファミリーを含めた数多のローグスの団体。

4大ファミリーの1つだったタイラー・ファミリーの跡取りだったアルフォート・タイラーは、そのカリスマ性と強大なリーダーシップで混乱を収集し、ドン・タイラーとして全てのローグスを改めてまとめた訳だが、義を重んじる彼に相容れない悪辣な連中もまた多かったことだろう。

無論、タイラーもローグスである以上非情な一面はあるだろうが、芯から腐った人間と呼べないような連中は確固として存在する。

そういった連中すら押さえ込めたのがドン・タイラーたる由縁ではあるが、中にはついにそれに逆らう考えを持つ者が出てもおかしくはない。

『その裏切り者ってのはそんなに大きな力を持つてるのか？ドンの動きを止められるだけの。』

浮かんだ疑問をそのままシアリーにぶつける。

『……いえ、主だった部下は基本的に彼に絶対の忠誠を誓っているはずよ。ただ、最近デューマンの出現なんかで、世情が不安定でしょ？ こういう時にドン自身が対応しなければならぬ反乱の噂なんかが流れると、せっかくまとまったローグスの団結に嫌な影響が出かねない。私達はそれを一番恐れているの。』

自身の無力さを嘆くように、悔しげにうつむきながらシアリーが説明する。

デューマン。ヒューマンの中から突然出現した新種族と言える存在。確かにその他にも原生生物の凶暴化など不気味な話題にことかかない最近の情勢下において、反乱などという事態は致命的な混乱を招きかねない。

『すると、私達への依頼はその裏切り者の処分ということでしょうか？』

緊迫した話題に、戦士の顔つきに変わったヘンリーがたずねる。

ずいぶんとデカイ話になってきた。

しかし、こちらの緊張をほぐすように、表情を和らげたシアリーが否定の返答をよこす。

『いえ、ごめんなさい。今のはあくまで私達の事情よ。ローグスの内輪もめに、あなた達外部の人間は巻き込めないわ。』

??

予想外な答えだった。

『おいおい、それじゃ今の話はなんだったんだよ。俺達にそんな話しちまって大丈夫なのか?』

依頼の話ならまだしも、今の内容こそ外部の人間が聞くべき話ではないはずだ。反乱の噂をタブーとするなら、こうして事情を知らない俺達にそんな話をするのは矛盾以外の何物でもない。

『言ったでしょう。お詫びよ。ソアラ、必要なことではあったけど、あなたの誇りを私は傷つけてしまった。それに謝罪するにはこちらもアナタと、アナタが紹介してくれた人達を信頼しているんだって証を見せたかったの。』

……参った。正直彼女という人間を俺は見くびっていたらしい。

ソアラが大切にしているもの。その想いを全て理解した上で、彼女は金などではなく、自分出来る最大の誠意で謝罪の意を示してきたのだ。

『……………』

ソアラが呆気にとられた表情でシアリーを見つめる。

二人はしばし見つめ合った後、満面の笑みを浮かべあった。

『えへへっ、シアリーって、思ったたより結構バカだね。』

イタズラっぽく微笑むソアラの表情は、いつもの無駄にテンション



高い《愛の情報屋》のものだった。

『ほめ言葉として受け取っておくわ。』

そう返すシアリーもまた、自分の心が相手に伝わった喜びに微笑んでいた。

『大したもんだな。』

感心してつぶやくと、シアリーが反応する。

『あはは、タイラーの受け売りよ。心には心で返さないと、本当の仲間にはなれないってね。』

そう言つて微笑む彼女の笑顔から、ドン・タイラーという男の大きさと、彼女が自分のボスに寄せる深い信頼を感じた。

『話がそれちゃったわね。ここからが本題なんだけど、肝心のあなた達への依頼についてよ。』

表情を引き締めてシアリーが続ける。

『私のローグスとしての使命は、ここダグオラ・シティーの治安管理なの。』

驚きはあつたが、納得できる話だった。

確かに、モトウブにおいては他の惑星のように効果的な治安維持活動を期待できる団体はあまりない。同盟軍も本部のあるパルムのよくな活発な動きは望めないし、太陽系警察なんぞ、贈賄で腐りきつ

ていると聞く。かろうじて、ガーディアンズの常駐警護部が凶暴な原生生物の駆除などでその役割を担っているぐらいだろうか。

しかし街の内部に関しては、ローグスの影響が強い。

必然的に、市民の暮らしは良くも悪くもローグスと深く結びつくわけで、市民が最低限安心を得られるよう、治安維持などを行うこともあるのかもしれない。

まあ、法律なんぞ存在しないローグスの活動だから、他の星の治安維持とは活動内容が異なる部分も多いだろうが。

『説明しなくても、わかってもらえてそうね。』

シアリーが考え込む俺の様子を見て、満足げに微笑む。

ヘンリーも俺より傭兵暮らしが長い男だ。こうした事情は把握ずみのようで、頷いてシアリーに続きを促した。

『私としては、ドン・タイラーが決めたルールが遵守されていれば、あまりうるさいことを言うつもりはないの。私その他にこの街の各地域を担当する人間もいるけど、皆大体同じようなものよ。』

イタズラっぽく微笑むシアリー。ローグスにはローグスのルールがある。そこに口を挟む気はサラサラない。

『ただし、最近になって私の担当地域で見過ごせない事態が続発してるのよ。』

深刻な表情でシアリーが続ける。

『……人身売買』

言葉に込められた意味の重さにこちらの表情も固くなる。

『悲しいことだけれど、以前のモトウブにおいてはよくある犯罪だったのよ。でも、タイラーがドンとなつてからはローグス全体としても、こうしたあまりにも非道な犯罪は禁止の方向に動いてきているわ。……それに今回はあまりにも手段が悪辣なの。』

口を挟むべきでない空気がシアリーから伝わってくる。

『市民の、なんの罪もない子どもたちがさらわれているのよ』

泣き出しそうな悲痛な表情を浮かべ、シアリーが最後の情報を告げた。

初めて誘拐騒ぎがあつたのは一月程前。

当初はよくある不良少年の家出と捉えられたその出来事は、事件から二週間後、ダグオラ・シティーから離れた別の街で、臓器を奪われた身元不明の幼い遺体が発見されたことで痛ましい凶悪事件へと姿を変えた。

別の街のローグスから遺体の情報を聞いたシアリーは、特徴から誘拐された子供であることを悟り、自分の担当する地域からそのような事態が発生したことに、比喩ではなく唇を噛み切る程の怒りを覚えたと言う。

……傭兵をしていれば、顔を背けたくなくなる事件に巻き込まれることは多い。しかし、依頼の標的に殺意を覚える今回のようなケースはそう多くない。

『本当に情けない話だけれど、私の指揮下にあるチームは一度、すでに警戒の巡回中、犯人とおぼしき連中と遭遇してるのよ。でも取り押さえるどころか、返り討ちにあってしまった。十人以上いた部下もその時の戦闘のせいで、既に戦えるのは私と、さっきあなた達に襲いかかった三人だけなの。』

腕試しの一件を思い返す。連中の腕前では、戦闘の訓練を積んだ犯罪者などが相手では確かに話にならないだろう。

あの茶番に思えた騒動も、連中なりに信念をかけた戦いだっただのかもしれない。

おそらくローグスの規模を考えれば、本来ならもつと腕利きの連中もいるのだろうが、ここに来て先程の裏切り者への対処の件が思い返された。

そうした連中は、その裏切り者への対応に追われている。

シアリーは語らないが、他に理由は考えられなかった。

最初にドン・タイラーがこの場に来たがっていたという話も、きっとそういう事情を踏まえて、街を取り仕切る者の責任として、正式にこちらに直接依頼をしたかったからなのではないだろうか。

『ソアラ、俺から依頼出していいか？』

突然話し始めた俺に、シアリーが目を丸くしている。

問いかけられた当のソアラは、すでに予想していたのか笑みを浮かべていた。

『自分の感情で金額変えるのはプロ失格なんだけど、今回はアタシも腹立つてるから安くしとくよ。ルート洗って、その腐った連中の尻尾掴んでみる。』

見慣れたイタズラっぽい笑顔。

この笑いが出た時、コイツの仕事は早い。

『おう、頼むな。……ヘンリー。』

『ソアラさんから情報入るまで、私達に出来ることはやはり街の巡回でしょうね。日付変わってますから、今日からやりましょう。夕方以降が効果的かと。』

さすが、何も言わなくてもこちらの意を汲む頼もしき相棒。

『マース?』

驚いたままのシアリー。やれやれ、リーダーがこれでは困ってしま  
う。

『俺達は街並みにそこまで詳しくないからな。案内は頼むよ、依頼  
人殿。』

もう俺にこれ以上語る言葉はなかった。

ニヤリと笑いながら改めてシアリーに右手を伸ばす。

『…ありがとう……』

握り返された右手には女ローグスの決意が込められていた。

夕暮れに染まり始めたダグオラ・シティー。

俺は真紅のゴコウバオリをなびかせて歩く。

隣には青い相棒。

『スパツと解決させて、またシアリーのところで飲もうな。』

旨かった酒を思い出し、相棒に提案する。

『次は奢りでなく、報酬で支払いますよ。』

ニヤリと笑い返してきた相棒にやれやれと頷き返す。

目指すは麗しき依頼人である女ローグスとの待ち合わせ場所。

路地裏には仲良く遊ぶビーストの子ども達が見える。

『さて、行くぞ相棒。』

『了解しました。』

迫る夜に挑むがごとく、俺は静かに歩き始めた。

## 第二話 く誇りく（後書き）

読み返したら、『モトウブに同盟軍はない』などと自信満々に言っている主人公に気づき愕然（汗）

慌てて修正しました。（やっとやり方を覚えたWW）

下地に公式設定がある二次創作作品ゆえに、設定はなるべく遵守したい筆者のつまらないプライドでやんした。

お読み頂いた方へ感謝を捧げつつ、あとがきとさせていただきます。

m ( ( ( m

第三話 〽理由〽 (前書き)

引き続きモトウブ編、第三話。

なんて造りしてやがるダグオラ・シティ。あんな設定、文章で表現できねーよ (涙)



### 第三話 理由

「なぜお前は傭兵なんかになりたがる？」

初めてその問いかけをしてきたのは俺に戦い方を教えてくれた人だった。

一挙手一投足、その全てに憧れて、今思い返してもよく死ななかつたもんだと思える、無茶な訓練にも必死に耐えた。

「お前は筋がいいな。」

ごくまれに見せる、満足げなその微笑みが見たくて、ただひたすらに教えられたことを体に刻みつけた。

最後の最後まで、照れくさくて本人に伝えることができなかつた、俺が剣を取る理由。

そう、俺はただ、あんたみたいになりたかつただけなんだ。

『アルセバ・ファルサンか、懐かしいな。』

ショーウィンドウに展示されている、昔自分が使用していたモデルのツインセイバーを見て、ふとずいぶん昔の記憶が蘇った。

『テノラ・ワークスの商品はフォトン消費は激しいですが、その分

威力も大きいですよ。予備の武器に何か購入しておきますか？』

そう俺に話しかけてきたヘンリーも、自分の得意としている近接戦闘用のナックルのコーナーで、興味深そうに商品に目をやっている。

ここはダグオラ・シティー内にある、グラール三大武器メーカーの一つ、テノラ・ワークスショップ店内。

シアリーが指定してきた待ち合わせ場所は、独特の質実剛健なデザイン武器が数多く並び、命を預ける商売道具を求めるガーディアンズや傭兵達でごった返す店の中だった。

この星では無骨な雰囲気好まれるのか、店内は広くとも余計な装飾はなく、数多くの商品が強化ガラスのショーケース内に無造作に展示されている。

『いや、俺はいーわ。モノメイトだけ補給しとくか。』

待ち合わせ時間より少し早めに着いた俺達は、ついでに戦闘に必要な用意を整えるべく、ふらふらと店内を物色していた。

『ソルアトマイザーもそろそろ手持ちの分が切れますね。一応まとめて購入しておきましょうか。』

ヘンリーの方もお眼鏡に叶う武器は無かったのか、体力回復、及び毒などの異常状態を沈静化させる携帯医療品を求め、武器売り場から消費物売り場へと移動しようとする。

『あら、早いよね。時間に正確なのは女から見てポイント高いわよ。』

『

背後から突然声をかけられ、俺とヘンリーが振り返る。

『へえ……こりゃ驚いた。』

振り返った先に立っていたのは笑顔をつかべた待ち合わせ相手の女性ローグス。

自然と引き付けられる整った魅力的な笑顔は今朝方まで一緒にいた時となんら変わらないが、身にまとう服装が別人のように一変していた。

『ファシネス・ベストにウエスタイルボトムW。レトロな雰囲気をつまく着こなしてる。良い趣味してるじゃんか。よく似合ってるよ。』

襟口の立った、片口までの白っぽいデニム生地ベストに、腰回りに赤いアクセントが入ったスリムパンツ。

昨晚着ていた、体のラインがはつきり出るドレスも良かったが、活動的な印象を受けるこの服装も、彼女によく似合って見えた。

『ありがとう。……アナタ本当に変わってるわね。ここまで服飾関係に詳しい傭兵なんて初めて会ったわ。』

身にまとう服の種類までズバリ当てられたことに驚いたのか、感心したように目を丸くしたシアリーが答える。

『服装つてのは人間性が現れるからな。相手がどんな嗜好の持ち主か、着てる服見りゃ大体分かっちゃうのさ。』

得意顔で説明する俺。

実際、服のセンスってのはその人間の性格を表す要因としてバカに出来ないもんだ。

「身軽でいいから」という理由だけで、昔から外装を一切変更しようとしないう頭の固い相棒にも、いつかこの崇高なポリシーを理解して欲しい。

『お似合いですよシアリーさん。その様子を見ると、どうやら戦いの経験もおありのようですね。』

そんな俺の思考を完璧にスルーするかのように、無粋な発言をかます我が相棒。

『ええ、一応私もローグスのはしくれだからね。自分の身は自分で守れるだけの心得はあるつもりよ。アナタ達の足を引っ張らないように、頑張らせてもらうわ。』

金髪の女ローグスは、そう言って余裕のある笑みで切り返してきた。

昨晩出会った時から気がついてはいたが、彼女の身のこなしは間違いないなく、ちゃんとした戦闘の訓練を積んだ人間のものだ。

活動的な服装に着替えた今、重心の取り方、周囲の気配への気配り等、立ち居振る舞いにも素人のような隙は見えない。

『頼もしいね。まあ依頼を受けた以上、君の身边に危害が及ばないようにするのも俺らの仕事だ。全力は尽くすから、大船に乗ったつもりでいてくれ。』

そう言った俺に、親しみのこもった笑顔でシアリーが答える。

『ありがとう。頼りにしてるわ。早速行きましょ……と言いたいところだけど、買い物途中だったんでしょう？私も調整をお願いしていた武器を取ってくるから、10分後に店の入り口で落ち合いましょう。』

こちらの口調に満足げに微笑んだシアリーが、そう言って武器売り場の店員の方へ歩きだそうとする。

『……という訳だヘンリー君。また10分後にな。治療系のアイテムの補充は頼んだぞ。』

そっぴい捨てて当然のようにシアリーの後に続く俺。

『ア、アナタという人は……。』

脱力してうなだれるヘンリーを尻目に、前を行くシアリーに追いついた俺は彼女と肩を並べて歩き出した。

『……ヘンリー、可哀想じゃない？』

追いついてきた俺に気づくと、くっくっとおかしそうに笑いをこらえるシアリーがそう話しかけてきた。

『いつものことすぎてもはや何が可哀想かわからん。大丈夫、あいつMだからああ見えて俺にいじられるのを楽しんでるんだよ。』

ここぞとばかりに好き勝手言う俺。

『仲が良いのね。ちょっと羨ましくなるくらいだわ。』

ひとしきり笑い合った後、俺達は調整の依頼を出していたというシアリーの武器を受け取る為、店員がいるカウンターの前に到着した。

『ああ、シアリーさん。依頼されてたブツ、もう仕上がってますよ。持ち帰りします？』

『ありがとう。ちょっと確認させてもらうわ。』

顔馴染みなのか、気さくに話しかけてきた店員に笑顔を返すと、シアリーはカウンターに出された自分の武器を受け取るべく手を伸ばした。

ツインヤスミノコフ2000H。

旧式のフォルムでありながら今なお実用的な武器としての評価も高い、実弾発射型の二丁拳銃だ。

『こりやまた良い武器だ。愛用武器がツインハンドガンってことは、君はレンジャーだったのか？』

一緒に戦闘に加わる可能性がある以上、プロとして事前に仲間の戦いのスタンスは把握しておく必要がある。彼女についてきた理由にこうした真面目な一面もあった。

『悔しいけど、近接戦闘をこなすだけの腕力も、テクニックに頼るだけの法撃力もワタシにはなくてね。唯一、かろうじて自慢出来そ

うなのがこういった銃の腕前だったのよ。』

苦笑しながらシアリーが答える。

『謙遜しなさんな。そのレベルの武器が扱えるんなら、普通に戦力として頼りに出来る。レンジャーなら俺達の戦い方とも相性いいしね。』

俺はお世辞ではなく、本心からそう言った。

ヤスミノコフシリーズは、その独特なフォームが特徴的だが、フォトン操作が難しく、熟練した人間でなければ実戦で使いこなすことは難しい。

基本的には近距離戦を得意とする俺やヘンリーにとって、遠距離からの射撃を本分とするレンジャーの援護が受けられるというのも、大いに喜べることだった。

『お褒めにあずかり光栄よ。』

嬉しそうに微笑むシアリー。

『しかし、ずいぶんと本格的な武器持ってるな。傭兵仲間にもそういうを欲しがる人間は多いんだぜ？』

返却された銃の入念なチェックを行い、異常がないことを確認して店員に礼を言った後、シアリーが大事そうに銃を抱えてつぶやく。

『この街の治安管理を頼まれた時に、タイラーから譲り受けたのよ。』

そう答えた彼女は、これまでの柔らかな笑顔ではなく、強い意志を感じさせる瞳と引き締まった顔つきに変わっていた。

『……………』

ドン・タイラー。今回の依頼の大元であるローグスの頭領。

酒場で依頼内容を聞いた時にも感じたが、彼女が自分のボスに抱く信頼は並々ならぬものがあるようだ。

俺は無粋とは知りつつも、好奇心に負けて彼女に訊ねてみた。

『ドン・タイラーが立派な人物だったのは聞いたことあったが、君と彼とはどういう経緯で知り合ったんだ？もちろん、話したくなかったら無視してくれていい。』

ことによると男女間のプライバシーに立ち入る質問だ。普段の俺なら絶対に関わろうとは思わない、図々しい外野からの問いかけだが、自分の使命を全うせんと凛々しさを感じさせる彼女への興味が、俺に不躰な質問を思い切らせた。

『あはっ、気になる？』

個人的な領域に踏み込む無礼な質問だというのに、彼女は気にした様子も見せずイタズラっぽく微笑んだ。

『彼はワタシにとって、ヒトとして生きる場所を初めて与えてくれた存在。兄であり、父親でもある。……………私もね、今回の件の被害者と同じ、「売られた人間」だったのよ』



『そつちに行きましたよ!!』

夜のとばりが降りた街並みを、相棒の声に誘導されながら疾駆する。

『マース、次の角を右に！これで追い込めたわ!』

背後から飛ぶシアリーの声。

ここモトウブの首都、ダグオラ・シティの特徴は、一言で言えば『巨大な岩山をくり抜いた自然都市』であることだ。

モトウブ開拓時代、開拓民であったビースト達は、ゼロから街を作り上げるのではなく、そびえ立つ岩山を削ることで、風雨をしのぐ住処を作り出した。

都市としての機能より、開拓・資源の確保を優先させたことによる無計画な道路拡張。

岩山の崖っぷちや、洞窟を掘り進めて作られた街のストリートは、まさしく迷路のように入り組んでいる。

案内役として、街の造りに精通しているシアリーが同行していなければ、こんな追いかっこは到底不可能だったはずだ。

『チェックメイト。……ほら観念してこっちを向きな。』

完全な袋小路に追い込まれたことを悟った柄の悪い若い男ビーストが、苦々しく歪んだ表情で追いついた俺へと振り向く。

『ちっ！なんだってんだてめえら！！何が楽しくてヒトのことを追いかけて回しやがる！！』

柄の悪い面構えに、よく似合ったダミ声。

絵に描いたようなチンピラは、血走った目でこちらを睨みつけてくる。

『お前みたいなムサいの追いかけて、楽しい訳ねーだろ。無駄な体力使わせんなバカやろう。』

心底うんざりしてそう言い捨てると、逆上した男ビーストがナノトランサーから一本のダガーを取り出し、こちらに駆けてきた。

『なめてんじゃねえぞこのガキいっ！！！！！！』

手に持つダガーをブンブン振り回しながら、元気に走り寄ってくる。

うわー、この程度の挑発でそこまで取り乱すとは、生活に圧倒的にカルシウムが足りてないねアンタ。

訓練の様子がかけらも見えない素人の動きに、武器を取り出す必要も感じない俺は素手で迎え撃とうと構えを取る。

ドドンー！！

刹那、背後から響く重厚な射撃音。

『がふっ！』

銃撃音と同時に、目の前の男ビーストが右肩を押さえてうずくまった。手に持っていたはずのダガーは、くるくると勢い良く回転して宙に舞った後、俺の足元近くに突き刺さった。

『うわ、あつぶね。おいおい、撃つなら撃つって言ってくれよ。こちに当たったらどーすんだ。』

苦笑しながら背後を見やると、ツインヤスミノコフを両手に構えたシアリーが笑みを浮かべて佇んでいた。

『あらごめんなさい。アナタなら絶対当たるようなヘマはしないだろうと思ったものだから。』

小悪魔的な笑いと共に、挑戦的に答えるシアリー。

……なるほど、今のは彼女なりのアピールなのかもしれない。

自分の腕前はこの程度はあるんだと、こちらへ意図的に示したニユアンスが、イタズラっぽい笑みの中にうつつすら見えた。

やれやれ、美しい花はトゲを持つとはよく言ったもんだ。

呆れる俺の横を通り抜け、シアリーはうずくまる男ビーストに近寄り、うめき声をあげ続ける男を冷たく見下ろした。

『ワタシの目の前でつまらない真似してくれたわねヨソ者さん。さつさと懐にかくした、すったメセタカード出しなさい。』

『な、なんの…ことだ……』

苦痛に顔を歪めながら言いとぼける相手に対し、シアリーが改めて銃口を向けた。

『さっきのは殺傷力のないゴム弾だったけど、これ以上見苦しい言い訳続けるなら容赦なくその顔に風穴空けるわよ？』

ガチャリと音をたてる銃から、冷たい殺気がこぼれる。

『ま、待ってくれ、わかった！わかったよ！出すから勘弁してくれ！…！』

シアリーの様子が脅しではないことに気づいたのか、慌てた男が懐からカードを取り出し、ヤケになったように投げ捨てた。

シアリーに目で合図を受けた俺は、無造作に近寄ってカードを拾い上げる。

『スリ程度のつまらない真似、ワタシだって本来なら気にしないけど、アンタこの街のルール分かってないわね。こういう仕事するんなら、通すべき筋つてもものがあるでしょ？』

冷たい目で男を見下ろしたまま、威圧的に言葉を続けるシアリー。

『この街でヤンチャしたいなら、ローグスを見無視するような真似は命取りよ。二度目は警告なしで風穴空けるから、挨拶の必要が理解できたらさっさと失せなさい。』

言い捨てられた男は、怯えた目をしたまま、肩口を押さえながらヨロヨロと走り去っていった。

『よくあるのか？こついうこと。』

男が去つたのを見送つた後、シアリーにそう問いかけてみる。

『まさか。最近入植者は増えてるけど、土地のルールを無視するよ  
うな田舎者はそう多くはないわ。ローグスを無視できるのは、今み  
たいな何も知らないヨソの星から来た三下か、気が触れた狂人ぐら  
いよ。』

うんざりした様子で苦笑しながら、シアリーが近づいて来て、俺か  
らメセタカードを受け取る。

『ルール違反と言っても、スリ程度なら可愛げもあるし、今みたい  
に犯人脅して、被害者から謝礼貰って一件落着きただけ……ね……』

暗い目をしたシアリーがつぶやく。

「同朋の人身売買」という最悪なタブーを犯した今回の依頼の標的  
に、言葉で表しきれない怒りを感じているのだろう。

先程、彼女自身から連中を憎む理由をはっきり教えられた俺には、  
語りかける言葉が見つからず、落ち着かせるように、ただその肩に  
手をおいた。

『大丈夫、さ、ヘンリーと合流して巡回に戻りましょ。余計な仕事  
手伝わせちゃってごめんなさいね。』

何でもないといった具合に笑顔に戻ったシアリーが、俺にそう答えた。

シアリーの案内で標的連中の手がかりを得るべく、人攫いが起きたという犯行現場周辺を巡回していた俺達は、「事前にローグスに面通しをする」という最低限の土地のルールを無視し、スリを行った三下の愚行に目の前で遭遇し、今の追いかけっこに至ったという訳だ。

シアリー達ローグスのこうした活動が、無法地帯として悪評高いモトウブの都市に最低限の治安を与えている。

俺は裏社会には裏社会なりの抑止力の存在を目の当たりにし、無法者と呼ばれる彼らローグスへの印象をまた少し改めていた。

『やあ、無事片づいたみたいですね。』

スリの犯人を追い込むため、別ルートを走ってきたヘンリーが合流する。

『お疲れ相棒。地理の把握はすんだか？』

逃走するスリを追う間、ヘンリーには追跡と同時に今後の活動に不可欠なこの街の地形情報の分析を頼んでおいた。

いざ肝心の標的連中と遭遇した際、不慣れな土地勘が原因で逃げられるという不手際は避けたい。

『この周辺、街の南側一帯は大体把握しましたよ。さすがに複雑な造りになってますから、全体の情報を得るにはまだ少し歩き回る必

要があります。まあ、良い予行演習になりましたね。』

そう言って笑顔を見せるヘンリー。

こついう前準備を任せられる仲間がいることは、仕事をこなす上で非常にありがたい。

俺はヘンリーに笑顔で親指を立てると、シアリーに語りかけた。

『いいかシアリー、アンタにはこれだけ超有能な傭兵二人が味方についている。多少アツパラパーだが、俺が知る限り最高に腕の良い情報屋も、ゲスな奴らのねぐらを掴むために動いてくれている。心配のタネは、完膚なきまでに俺達が叩き潰してやる。だから君はこれ以上何も心配するな。』

突然の長口上に、不意をつかれたシアリーが呆気に取られる。

俺の脳裏には、テノラワークスショップで語られた彼女のセリフが蘇っていた。

《売られた女がどういう目に遭うかは、大体想像つくでしょ？ワタシは自分が人間なんだってことを忘れることで、絶望って意味すら考えないようにして息をしていたわ。》

その苦しみがどんなものか、気持ちかわかるなんて軽々しいことは口が裂けても言えないが。

《そんな状況から救い出してくれて、ローグスという、家族という

知らなかった温もりを与えてくれたのがタイラーだったの》

その、与えられた喜びに報いたいという気持ちには、俺にも覚えがあつたんだ。

《だからワタシも思ったの。いつか彼のような存在になりたいって。》

抱く理想は、与えられた温もり故に。

《絶望し、生きている意味を見失ってる、そんな誰かにも、生きる理由を与えられる、そんな存在になりたいって。》

剣を握る確かな理由が増えた俺に、彼女が満面の笑顔を返してくれた。



### 第三話 〈理由〉（後書き）

モノローグ、及びシアリーへの強い共感。

マースの設定上、深い意味があるんですが、なかなか納得いくレベルで表現しきれない

（ノーマル）

書き進めるたびに自分の文才の乏しさが浮き彫りになります。はい。

作中の『モトウブで犯罪行為をする前にはローグスへの挨拶（みかじめ料などの支払い）が必要』という設定は、本作オリジナルのものです。

裏社会の組織って言うたら、筆者的にはこんなイメージ。

うつつむ、貧困な発想でごめんなさい。切腹。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1458y/>

---

～ 傭兵達の挽歌 ～ PSPo2i外伝

2011年11月7日08時09分発行